

「三匹のくま」

おばあさんはドアを開けて中へ入りました。すると、テーブルの上におかゆが乗っていました。おばあさんは、大喜びでおかゆを食べはじめました。

まず、大きいでっかいクマのおかゆを食べてみました。熱くてとても食べられません。おばあさんはぶつぶつ文句をいいました。つぎに、中くらいのクマのおかゆを食べてみました。冷たすぎます。おばあさんはまたぶつぶつ文句をいいました。それから、小さいちゅぽけなクマのおかゆを食べてみました。熱くも冷たくもなくちょうどいいあんばいだったので、おばあさんは、すっかり平らげてしまいました。

語りの森HP 《外国の昔話》

このあとおばあさんは、くまたちのいすを大きいものから順に試し、最後の一番小さいくまのいすを気に入ります。次にベッドを大きいものから順に試し、やはり最後の一番小さいくまのベッドを気に入ります。

「白雪姫」

小屋に入ってみると、そこにあるものはみんな小さく、かわいらしいものばかりでした。テーブルには白いテーブルクロスがかかっていて、その上には小さなお皿が七枚ならんでいました。どのお皿にもスプーンと、ナイフとフォークがついていました。グラスも七つありました。壁ぎわにはベッドが七つならんでいて、雪のように白いベッドカバーがかかっています。

白雪姫はとてもおながすいていたし、のどもかわいていたので、どのお皿からもひと口ずつごちそうを食べ、どのグラスからも表すつワインを飲みました。食べおわると、白雪姫はとてもつかれていたで、ベッドに横になりました。けれども、どのベッドもうまくあいません。長すぎたり、短すぎたりしました。七番めのベッドがちょうどよかったので、すべてを神さまにおまかせしてそのベッドでねむりました。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳／小峰書店

白雪姫は、七人の小人のベッドを試してみます。そして、一番最後のベッドがちょうどよかったので、そのベッドで寝ました。すっきりわかりやすいですね。

「いばらひめ」

お祝いの宴がおわるころ、占い女たちは、生まれた子にそれぞれすばらしい贈り物をさずけてくれました。ひとりの女は徳を、もうひとりの女は美しさを、そして三番めの女はゆたかな富を。そうやって、この世にあるかぎりのすばらしいものがさずけられました。十一人の女たちが贈り物をさずけたとき、招待されなかった十三人めの女がとつぜん入ってきて、大声でさげびました。

「この子は十五歳になったら、つむを指にさして死ぬであろう」そしてくりりとむきをかえて、出ていってしまいました。

すると、まだ贈り物をしていなかった十二人めの女が歩みでました。この女にもわるい予言をとり消すことはできませんでしたが、それを弱めることはできるので、こういいました。

「けれどもそれは死ぬのではなくて、お姫さまが、ただ百年のねむりにおちることにしましょう」

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳／小峰書店

十二人の女たちが順番に贈り物をしますが、十一人目の直後に呪いがかけられます。そして、最後の十二人目の女の「おひめさまは百年の眠りに落ちる」という言葉がおひめさまの運命を決めます。

「捨て子と鬼」

子どもたちは、いつまでも母さんをまっていますでしたが、あたりが暗くなっても母さんはもどってきません。上の二人の子は、しくしく泣きだしました。

すると、七つになる末の弟が、「兄さんたち、泣いたってしょうがないよ。どこか泊めてくれる家がないか、さがそう。木にのぼれば、なにかみえるかもしれない」といって、木にのぼっていきました。

ずつとむこうのほうに、明かりがひとつ、みえました。弟は、木からすべりおりと、「むこうに明かりがみえる。あそこへ行ってみよう」と、兄さんたちをばげまして、明かりを目あてに山道を歩いていきました。

『日本の昔話4』小澤俊夫再話／福音館書店

三人目の子どもが主人公です。このパターンはよくありますね。